

「人生の一大転換」

フィリピの信徒への手紙

第3章 10節～11節

説教 本庄 侑子 伝道師

毎年この時期になると頭を支配する問いがあります。世界は変わることができるか？私は変わることができるか？私の人生は世界を変える力を持てるのか？

その理由の一つは、新しい年を主のみ言葉により歩み始めても変わらない自分、変わらない日常、変わらない世界を見るからです。阪神・淡路大震災を思い出すことも、大きな理由の一つです。私は震災当時、奈良に住む小学6年生でした。初々しい希望を胸に中学受験に備えていました。あの朝から、私の心の中に何とも言えないしこりができました。震災は努力に基づく人生観をなぎ倒し、志望校に合格はしたものの、あの朝生まれたしこりは消えませんでした。一方で、最も身近な家族を大切にできない自分がいました。世界は変わることができるのか？私たちは変わることができるのか？私の人生は世界を変える力を持てるのか？

今朝お読みしているみ言葉は、人生をたった一事にかけた人の言葉です。「わたしは、キリストとの復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」伝道者パウロの言葉です。パウロはかつてキリスト者たちを力の限り迫害してきました。それが一転して、キリストを宣べ伝えるものとなり、二度と他の方向に曲がれなくなったのです。キリストの苦しみを共有したい、私も愛するものになりたい。それが、キリストの復活の命にあずかった私が、なおこの世に生かされているたった一つの意味だ、そうパウロは言っているのです。かつて恩師が言いました。キリスト信仰は観念的な思想ではなく、具体的な生き方のことだと。動的な力、私たちの人生を変える神の力です。

ある女性は、体の筋肉が次々と動かなくなる病いを負った夫と13年寝起きを共にしました。この方は、度重なる看病で腱鞘炎にかかりましたが、それを「一人の人間の命を守るにすれば軽い損傷というべきだろう」とこともなげに言います。報われず、不条理な人生です。しかしここにこそ、たぐいまれな美しい人生があります。誰かを愛し抜くために犠牲をいとわない人生において、神の愛が形をとり、世界を本当

の意味で変えていくからです。

『日本人とユダヤ人』の著者は、「私は、日本にキリスト教徒はいないと思っている。日本教徒のキリスト派がいるだけだと思っている。」と辛らつに言い切ります。これは過ぎた批判でしょうか？福音主義教会連合の機関紙の最新号で目にした近藤勝彦牧師の文章も思い出します。「日本の伝道の危機は、容易なことでは克服できないでしょう。私たち自身の中に、よほどの宗教改革が起こらなければ、日本の教会は伝道的教会に立ち直ることはできません。」パウロの祈り、代々のキリスト者たちを導いてきた祈りは、日本教徒キリスト派に口にできる祈りではありません。しかし、大伝道者パウロだからできた一大決心でもありません。同じキリストに捉えられた私たちの内でも、燃え盛っているはずの祈りです。

一つの歌を思い出しました。留学先のアメリカで出会った、日本でキリスト者として生きることに疲れ果てた人たちと、叫ぶように歌った歌です。「主よ、あなたはいつも私の心の中にいます。ひと時も離れることなく、この心にあなたが私を愛しているように、私もあなたを愛せるようになりたい。主よ、どうか私を引き寄せて下さい あなたの十字架の愛を もっともっと知りたい あなたと共にずっと生きていく 私の人生を変えた 愛を伝えるために」同じ祈りが、私たちのうちにも燃え盛っているはず

世界は変わることができるでしょうか？私たちは変わることができるでしょうか？私たちの人生は世界を変える力を持つことができるでしょうか？答えは明確です。洗礼を受け、キリストの復活の命に生かされ、祈りの霊を頂くこと、そしてすべてのキリスト者たちが、その内に燃えるたった一つの祈りに本気で生き抜くこと。心に浮かぶ誰かを愛しぬくこと。赦せずに来た人を赦し、愛しぬくこと。それがすべての答えです。人間にできないことも神にはできる。あなたもその一人になれます。だから今日、ここにいます。

(記 説教要約奉仕者)